

# 会話文における「から」の用法

## ——理由を表わさない「から」——

楊 宏 華

### 1. はじめに

日本語母語話者が日常生活に何げなく交わした会話でも外国人の日本語学習者にとって、理解し難いところが少なくない。因果関係を表わすとされる接続助詞「から」の用法も日本語学習者が悩まされる原因の一つである。日本語の教科書では接続助詞「から」の用法は、殆ど「原因・理由・根拠」とされている。しかし、実際の日常会話では、この三つの用法以外に非常に広く使われている用法がある。いわゆる理由を表わさない「から」の用法である<sup>(注1)</sup>。

本稿の目的は会話の文脈、背景、場面など語用論にかかわる条件によって、会話文における理由を表わさない「から」文の構造、意味用法および話し手から聞き手への働きかけなどの関連付けはどういうものか、を明確にすることである。このため本稿では対象文を「話し手が特定の聞き手に対して伝達行為を行う文」である「対話文」<sup>(注2)</sup>に限定する。ここでは「特定の聞き手に対する伝達という面を持たない文」である「非対話文」<sup>(注3)</sup>、語り文、描写文、論説文などは除き、小説の会話の部分、テレビドラマ、映画のシナリオから「から」が用いられた例文1528例を収集し、白川氏(1995)の判定方法<sup>(注4)</sup>に準じ、理由を表わしているかどうかを見分けてみた。実際に理由を表わさない「から」の例文を考察してみると、文脈、場面によって、用法も様々である。今回、提出したものはその一部である。

### 2. 「X から Y」という形式になっている完全文の「から」の用法

「から」で表わされる前節(X)と主文とする後節(Y)が両方を揃え、前節(X)の内容はお膳だてとして示し、後節(Y)である行為行動を聞き手に要求する。この種の会話文の後節は必ず、命令・依頼・勧誘・希望・期待などの表現が用いられている。

#### 2.1 情報提供

情報提供のタイプは基本的に前節から後節という順番で会話が進む。前節と後

節を置き換えては、不自然になる。

文の前節は話し手が聞き手にある情報を提供するために設けられ、後節はその情報に合わせて聞き手に行為行動を要求する。前節の内容は、話し手しか持っていない情報であり、聞き手にとって知らない新しい情報でもある。また、話し手がこの情報を聞き手に提供する本当の動機は、後節で聞き手に対しある行為行動要求を言い出すために、準備した踏み台でもある。

元々話し手が最初から聞き手に何かをさせよう、やってもらおう、という目的を明確にした上での発話であるので、この情報提供は話し手が積極的な態度で提供したと考えられる。しかし、話し手が積極的に聞き手に提供した情報は客観的に存在している情報であるため、聞き手側が話し手から何らかの行為行動を要求されたとしても、嫌な気持ちにさせられることは無い。

2.1.1 「から」で表わされる前節は話し手が聞き手に要求する行為行動を必ず実現させるための情報提供である。

このタイプの「から」の完全文は実はまず人間関係の位置づけの問題にかかわっている。話し手の社会的地位は必ず聞き手より上であることを前提とする。言い換えると、話し手は目上であり、聞き手は目下である。この前提条件があるからこそ、話し手が聞き手にある行動を要求するとき、普通の依頼表現より命令形の表現が用いられることが多い。聞き手はこの人間関係の位置づけの違いを考慮し、ある行為行動を要求されると予想した上で、話し手が提供した情報をきちんと聞き入れ、最初から無条件で引き受けるしかないという覚悟を持つに至るのであろう。

また、聞き手にとって、この提供された情報は必ず、あとで自分が要求される行動を遂行するために関わりのある重要な情報であると承知している筈である。この情報の内容を理解できなかつたり、また、無くしてしまつたりしたら、自分に与えられた任務を上手く完遂できずに、失敗してしまう。また、そういう結果を引き起こしてしまつた場合、その後、どう処罰されるかなどと、恐れるに至る。従って、話し手は必ず自分が信用できる相手に情報を与えようとする。引き受ける側の聞き手も必ず要求された行動を無条件でやり遂げる決心で、受け入れるに違いない。

例(1)：一平「何だよ！」

雪乃の声「一平！すぐ来て！」

一平「どうしたんだよ」

雪乃の声「おかあさんが変なの！」

一平「変？」

雪乃の声「様子が変なの！今タクシーで“坂下”につれてくから、すぐ追

いかけて！タクシーで来て!!」

一平「変ってどういう風に変なんだよ」

雪乃の声「(オフへ) おかあさん待って！(一平に) すぐ来てお願い！

(切れる)』『拝啓、父上様』

この会話の前節は雪乃が「今タクシーで“坂下”につれてく」で、急に変になった「おかあさん」(料理屋坂下の女将)を「坂下」(おかあさんの家)に連れていくということを一平(雪乃の息子)に知らせ、「すぐ追いかけて」の命令表現で要求した。一平にとっては、雪乃からの情報を知らされたと同時に、雪乃に要求されたままに行動するしかない。「今タクシーで“坂下”につれてく」の前節がなかったら、後節の「すぐ追いかけて」だけでは、会話が成立しない。前節を後節の後に後置して「すぐ追いかけて、今タクシーで“坂下”につれてくから」とすると、会話の流れが不自然になる。

例(2)：夢子「すまないけど一寸、お使いに行って欲しいの」

一平「何ですか」

夢子「東済会病院。判るよね」

語り「(低く) 熊沢先生の入っているところだ！」

夢子「あそこの、入ってすぐ右側に、第三病棟の受付であるから、そこであなたの名前言って、林田婦長さんて人呼び出すと来るから、これ(小さな包みを出す)渡して来て。只それだけ。それでこれ車代。タクシーで行って」『拝啓、父上様』

例(2)の場合「から」が二度用いられ、一見複雑に見えるが、実は例(1)と同じく、二つの「から」節とも相手にある行為行動を要求するための情報提供である。複雑とみた場合、夢子という女将は板前の見習いの一平を林田婦長を通じ、入院している熊沢先生にあるものを渡す、という最終目的を実現するため、まず、林田婦長に会うため、「あそこの、入ってすぐ右側に、第三病棟の受付である」ことを一平に伝え、「そこであなたの名前言って、林田婦長さんて人呼び出す」ことを要求し、次に林田婦長が「来る」ということを明確に伝えてから、林田婦長に会う目的として、「これ(小さな包みを出す)渡して来て」と持ち出す。

しかし、「あそこの、入ってすぐ右側に、第三病棟の受付である、そこであなたの名前言って、林田婦長さんて人呼び出すと来る」までの内容は全て、後節に続く「これ(小さな包みを出す)渡して来て」を実現させるための踏み継ぎと見れば、ノーマルな表現となる。また、社会的地位からみて、夢子は目上であり、夢子から持ち出された要求に対して、一平には選択の余地はなく、与えられた任務を言われたまま遂行するしかないと考えられるであろう。従って、「渡して来て」という「て」で終止する依頼・要求表現になっているとしても、実際は「命

令の表現」でもある。

2.1.2 「から」で表わされる前節は話し手が聞き手に依頼する行為行動を必ず実現させるための情報提供ではない。

このタイプは2.1.1と同様前節で話し手がある情報を聞き手に提供し、その情報にあわせ、後節で聞き手に何らかの行動要求をする。しかし、2.1.1と異なるところは、話し手の聞き手に対しての行動要求に必ず実現させよう、やってもらおうという強い意志がないことである。このタイプの情報提供はあくまでも聞き手に参考材料として提供される。あるとき、ただ、会話が生じる場面、文脈の流れによって話し手が聞き手とも関わりがあり、聞き手が持っていない、聞き手に知ってもらいたい、提供すべき情報を提供するだけ、の情報提供であると言える。聞き手への行動要求を必ず実現させるための情報提供ではない。

従って、その続きの行為行動要求を持ち出しても、聞き手に任せる気持ちの方が大きいので、この行為行動要求は必ず実現されるとは限らない。また、話し手は意図的に発話したとしても、必ず聞き手に何かをさせよう、やってもらおうとはしない。話し手と聞き手の社会的地位も目上と目下とは限らず、もっと広い範囲の人間関係である。このように2.1.1と異なる背景があるため、話し手が2.1.1の命令の意を表わす表現を用いるケースと違い、後節に希望・期待・誘い・依頼など聞き手への強制力が低い柔らかい表現が用いられている。

例(3)：村長の声「彩佳。彩佳？」

彩佳「(ハット振り向き、笑顔になり) 村長。どうしたの？」

村長「本土に出張でな。お前は？東京へ下見か」

彩佳「……ウン」

村長「あっちに坂野もいるから、来んか。一緒に饅頭でも」

『Dr.コトー診療所』

この例文は村長が町で偶然に彩佳に会い、生じた会話である。村長は「あっちに坂野もいる」という情報を彩佳に伝えた理由は坂野という人物が彩佳の知り合いだからであり、村長が彩佳を「来んか」と誘うための情報提供ではない。これにより、彩佳が村長の誘いに「行く」可能性もあり、「行かない」可能性もある。

例(4)：律子『この前はなしたアパートの件』

一平「——。ア！ハイ！」

律子「部屋も空いたそうだから。年内は店がお忙しくて引っ越しする時間ないだろうけど、一度暇な時見に行ってみよう」

一平「ア！ハイ！ありがとうございます！」

律子「横寺町の竹地ハイム。二〇三号。スーパーの角曲るとすぐ判るから」

一平「ハイ」

律子「一階に恩田さんという人が住んで、そこを訪ねてうちの名前言えば鍵貸してくれることになってるから、今度の日曜日でも行ってらっしゃい」

一平「すみません」

律子「用事はそのこと」

一平「ありがとうございます。失礼します」『拝啓、父上様』

例(4)は基本的に例(3)と同じ構成、同じ意味を持つ。話し手の律子は「から」節で「一階に恩田さんという人が住んで、そこを訪ねてうちの名前言えば鍵貸してくれることになってる」という情報を聞き手の一平に提供し、後節で「今度の日曜日でも行ってらっしゃい」という提議をしたにもかかわらず、「今度の日曜日に行くかどうか」の決め手は実は一平である。このタイプも基本的に「から」で表わした情報提供の前節と誘い・提議・希望などの表現を用いる後節とは置き換えることができない。前節での準備のお蔭で、後節でのある行為行動の誘い、提議、希望などを持ち出すことが出来る。

## 2.2 言いわけ

話し手が前節である口実を設け、後節で聞き手に行為行動を要求する。前節と後節を置き換えることができる。

このタイプの構成は2.1と同じだが、2.1と違う点は、前節で話し手が聞き手に提供する情報は真実ではないということである。2.1の場合、話し手が聞き手に提供した情報は客観的に存在しているので、話し手がこの情報に基づいて、前もって意識的に準備をしておいてから、聞き手にある行為行動を要求する。聞き手に提供された情報は全部とは言えないかもしれないが、ある程度は真実である。しかし、この2.2のタイプは話し手がある突発した事件に対応するためや、本当の理由を言いにくい、何か理由をつけなければならないような状況で、仕方がなくその場で適当に思い付いたことを理由にして前節を作り上げる。

この口実を設けるための情報提供は、形だけのものだから、いくらでも作れるし、他のものに変えて聞き手に示しても、会話の意味に全く影響することはない。元々話し手がこの口実を設けるか否かに関わらず、聞き手に要求したある行為行動を必ず遂行してもらえらるつもりでの発話である。言いわけタイプには話し手が聞き手に要求した行為行動を実現させようとする意志は2.1より強いのであり、強引なものとも言える。話し手の目的は全て後節に表わされるので、前節と後節を置き換えても、話し手の目的を先に話すか、後に話すか、だけの違いで、会話の意味は変わらない、さらに後節だけを単独で発話しても意味をなす。ただし、前節を後置すると、会話の意味はおかしくないが、「から」で終わる文になるので、「から」の意味用法も微妙に変わってくる。これについては、次回の考察で

説明する。

最後に、この種の事例を文脈から分析するとき、話し手が聞き手にある行為行動を要求するときに、強い気持ちを持っていると同時に聞き手に対して、どこか申し訳ない、後ろめたい気持ちも潜めているところがあるので、聞き手のことを考慮し、敢えて見え透いているとしても、嘘だと思われても、何か理由とは言えないことでも理由に見せかけ、聞き手に示す。また、行為行動を要求するとき、強引な気持ちを隠すため、後節に命令の表現を持ち出すのではなく、一般的な依頼表現を用いる。これも聞き手の気持ちを考慮する上での言葉の選び方であるとも言えるだろう。

例(5)：一平「時夫」

時夫「オス」

一平「一寸寄り道するから、先に一人で帰っててくれ」

時夫「ゆきちゃんどこ？」

一平「ちがうよ」

時夫「お伴します」

一平「ちが、うッ」『拝啓、父上様』

例(5)一平の発話、「一寸寄り道するから、先に一人で帰っててくれ」を見ると言いわけタイプの「から」の特徴が判ると思われる。話し手の一平はある女の子の友達に会いに行く、ということを時夫に知られたくない状況で、「一寸寄り道する」ということを適当に前に置き、それから「先に一人で帰っててくれ」という依頼をした。前節を後節のあとにつけて、「先に一人で帰っててくれ、一寸寄り道するから」となっても、意味は全く変わらない。また、後節の「先に一人で帰っててくれ」だけで文をなすし、話し手の発話の意味も変わらない。

例(6)：英介「洋、荷物を拾ってあがりなさい。それから、おとうさんとおかあさんはちょっとお話があるから、自分の部屋で遊んでいなさい」『女の椅子』

例(7)：ルオー「(電話) 修？ア、ボク。悪いけど兄さん急用できたから三時頃から店代わって？お願い(切る)」

石井「ア、また写真に割りこもうとしてる」『拝啓、父上様』

例(6)、例(7)も例(5)と同じ特徴を持つ。話し手が聞き手から何らかの便宜を図ってもらおうとする目的を持っている。しかし、話し手自身の都合やまた、聞き手のメンツなどから考えて、本当の理由をそのまま打ち明けたら、聞き手を不愉快な気持ちにさせるかもしれないので、目的を上手く達成するため、敢えて聞き手にも納得でき、気持ちよく、依頼されたことを引き受けられるような口実をつくる。ただし、後節にいくら丁寧な依頼表現が使われていても、話し手の一方的な

押し付けが感じられる。

### 2.3 条件提示

条件提示とは前節で話し手がある条件を聞き手に明示し、後節で聞き手に何らかの行為行動をとることを求めるものである。この条件提示は聞き手に求めた行為行動を起させるためであり、場合によっては交換条件としての提示もある。条件提示の場合、言うまでもなく条件を示すことであるが、聞き手が条件提示に従って、必ず要求された行為行動を実行に移すとは限らない。前節と後節の置き換えができる。

このタイプは全体のお膳立てから見ると2.1.1に近い。まず、話し手は聞き手にある行為行動を要求する目的で、明確に計画した上での発話をする。その行為行動の要求に聞き手が乗りやすい、行動しやすいため条件を明示する。この条件はもちろん聞き手にとって、不利ではない条件であることが前提とされる。しかし、この条件が聞き手にとってかなり有利なことに見えても、あくまでも話し手が聞き手に求めた行為行動をうまく達成してもらうための条件提示に過ぎないので、話し手が受益者であると言える。また、条件を示したとしても、求める行為行動が拒否される恐れもあるので、話し手は十分に考慮した上で、聞き手にとって十分に有利な条件を明示するケースもある。話し手が後節で聞き手に対して行為行動を要求する表現から考察すると、聞き手が要求された行為行動を引き受けてから完遂するまでに、負うリスクの度合いは大きければ大きいほど、話し手が用いる言葉の表現は丁寧となる。ここでも話し手が前節で条件を提示してから後節で行為行動を要求する、という順で発話されるのが一般的であるが、前節と後節を置き換えることも可能である。ただ、前節と後節を置き換えた場合、聞き手の立場からみて、ある行為行動を要求されたあと、何か条件を付け足されたようなきらいがある。これはあまり好ましくない表現であろう。また、会話の流れとして不自然さを感じる例もある。

このタイプについて、白川氏は「後節文だけを単独で発話しても意味をなす」と述べられているが、実際の例文を考察すると、全ての例文が単独で発話される時、意味をなすとは言えないところがある。また、話し手が聞き手に対して示した希望・依頼・提議など、スムーズに聞き手が行動に移れるように意図的に明示された条件も、必ずしも聞き手にとって有利な条件とは限らない。

例(8)：容子「ごめんなさい、最近わがままになっちゃって。手短に話します。あたし病気でもう長くないんで、槐多さんはひとりになります。あの人あなたのことと思っています。あなたも槐多さんのこと好きな筈です」

美奈子「——」

容子「お願い、ちゃんと聞いて。私が死んだら遠慮しないで欲しいのよ。」

すぐにとは言わないから、一緒に暮らして欲しいの

『いつか読書する日』

例(8)の会話は話し手の容子は美奈子に自分が病死した後、旦那の槐多と一緒にあってほしいという背景から生まれた会話である。容子は直接、美奈子に「一緒に暮らして欲しいの」という願いを言うに当たり、美奈子にすぐに断られる恐れがあるので、前節で「すぐにとは言わない」という条件を提示して、聞き手の美奈子に考える余裕を与え、心の準備をさせれば、直ぐ断られることを避けられるかもしれないと考えた。しかし、もしこの発話自体が聞き手に対して迷惑であるとすれば、いくら条件を示しても、聞き手が話し手の望む通りに行動する保証はない。この例文の場合、後節だけを持ち出しても、会話が成立する。

例(9)：金太が山本と漫才している――。

山本「あの、漫才じゃなく、予言をッ……」

金太「練習の相手してくれたらいくらでも教えるから、もう一度ね

『零のかなたへ』

例(9)の会話は友達間に生まれた会話である。例(8)の話し手が一方的に話を持ち出すのと違い、例(9)の場合、話し手が聞き手に何かを依頼されたあと、聞き手に持ち出した会話である。例文を見てみると、話し手の金太が山本から「あの、漫才じゃなく、予言をッ……」という依頼があったにもかかわらず、山本を「もう一度」漫才の練習の相手にしてもらいたいため、「練習の相手してくれたらいくらでも教える」という切り札を出した。話し手と聞き手はお互いに依頼し依頼される立場に立っているから、こういう場合の条件提示は実は交換条件とも言えるであろう。

### 3. 終わりに

本稿は「XからY」という形になっている理由を表わさない「から」の用法について、考察したもの的一部分である。まとめると次のようになる。「から」で表わされる前節は話し手が聞き手に求める行為行動を持ち出すため設けられ、後節で表わす目的を実現するためのお膳だてでもある。後節には命令・依頼・勧誘・希望・期待など行為行動要求などの表現が用いられ、聞き手にある行為行動を実行に移すように働きかける。話し手の発話意図によって、情報提供、言いわけ、条件提示の三つに分類した。

実際の日常会話には日本語母語話者さえ気づかない、理由を表わさない「から」の用法がこの3つ以外にも沢山あり、表現形式も多種多様である。会話文における理由を表わさない「から」の用法を研究の入り口とし、今後引き続き会話に最も多く使われている「から」の言いさし表現を考察し、理由を表さない「から」



の用法が生じる文脈、背景、場面との関係を説明していきたい。

- 注：1 白川博之（1995）は、「から」の理由、原因、根拠の用法を区別にせず、全て理由を表すと見ている。
- 2 益岡隆志（1991）では特定の聞き手に対して発話されたものであるかどうかの違いによって「対話文」と「非対話文」という名称を用いている。
- 3 同注2
- 4 白川博之（1995）では「S1カラ S2」という文において、S2に対して「ドウシテ」で質問し、S1が答えになっているかどうかテストした。自然な答えになっている場合は理由を表わす「カラ」と位置づけて、答えになりにくい、また、なっていない場合には理由を表わさない「カラ」としている。

参考文献：

- 柏崎雅世（1993）『日本語における行為指示型表現の機能』くろしお出版
- 小泉 保（編）（2001）『入門語用論研究』研究社
- 白川博之（1995）『理由を表さない「カラ」』仁田義雄（編）『複文の研究（上）』くろしお出版
- 前田直子（2000）『現代日本語における原因・理由文の「山田三分類」』山田 進・菊池康人・笏山洋介（編）『日本語 意味と文法の風景』ひつじ書房
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 蓮沼昭子 有田節子 前田直子（2001）『日本語 セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版

用例出典：

- 『05年鑑代表シナリオ集』（『いつか読書する日』）
- 『テレビドラマ代表作選集』（2006年版）（『零のかなたへ』）
- 『Dr. コトー診療所2006』（シナリオ）
- 『拝啓、父上様』（シナリオ）
- 『女の椅子』（集英社文庫小説）

付記：本稿執筆にあたり、富樫純一先生から多くのご指導を頂きました。心から感謝し、お礼を申し上げます。